

生物学的防除部会  
2022年度 第2回オンライン講演会のお知らせ

生物学的防除部会 2022年度第2回講演会を下記の通り開催いたします。  
会員の皆様はじめ多くの方がご参加くださいますようお願い致します。

記

日時： 2022年11月8日（火）13時00分～17時10分  
オンライン講演会 使用アプリ: ZOOM

演題1 「タケ由来ミミズ堆肥の植物病害への発病抑制効果とその要因」

東條 元昭 氏 大阪公立大学 農学研究科  
13:00 ～ 14:00

< 講演要旨 >

タケ由来ミミズ堆肥 (vermicomposted bamboo powder; VB) は、放置竹林で処分困っている竹材をパウダー化したものから作られる。これまでに土耕で *Pythium* 属菌、*Rhizoctonia* 属菌および土壌線虫によるキュウリ等の植物病害を抑制する効果が確認されている (e.g. You et al. 2018)。またこの堆肥を加熱処理したものが、水耕ホレンソウ立枯病 (病原体 *P. aphanidermatum*) に効果を示すことも明らかになっている (特許出願中)。この発病抑制の要因は明らかでないが、化合物の産生や微生物相の遷移が影響している可能性が示唆されている。本技術の開発に至る経緯を含めこれまでの研究について解説する。

● 演題2 「昆虫病原性微生物の感染機構と化学農薬との相乗効果」

神谷 克巳 氏 岐阜県病害虫防除所  
14:00 ～ 15:00

< 講演要旨 >

害虫の化学農薬に対する薬剤抵抗性の獲得が大きな問題となっており、化学農薬だけに頼らない総合防除を構成する資材の一つとして、天敵微生物の利用が期待されている。天敵微生物の防除効果は、化学農薬との同時施用により高まる場合がある。そこで、昆虫病原微生物と広く利用されている化学農薬の一種であるネオニコチノイドについて、いくつかの種類を組み合わせ、同時処理による殺虫効果を評価したところ、一部の組み合わせで、相乗効果が認められた。そのため、ネオニコチノイド処理が、昆虫免疫系に与える影響を評価し、相乗効果との関連性を検討した。

< 休憩 >

15:00 ～ 15:10

### 演題 3 「生産現場から考える生物的防除～100年後の当たり前を目指して～」

畠山 修一 氏 フリーランスの普及指導員  
(元埼玉県農林部所属)  
15:10 ～ 16:10

#### < 講演要旨 >

2007年に登場したスマートフォンは、僅か10年余りで国民の約8割に普及し、生活必需品となった。農業の世界ではグレンタンク式コンバインがそれに相当し、稲作農家には「当たり前」の装備となった。一方、生物的防除は1995年にチリカブリダニとオンシツツヤコバチが登録されて以来、四半世紀が過ぎたが、生産現場は未だ「特別な農法」という受け止め方を脱していない。本講演では、生物的防除を現場に普及する際、立ちはだかる様々な「壁」について論じ、100年後、生物的防除が「当たり前」となるための視点を提案する。

### 演題 4 「石原産業の生物農薬開発の取り組み」

森 光太郎 氏 石原産業(株)中央研究所  
生物科学研究室 生物・開発グループ  
16:10 ～ 17:10

#### < 講演要旨 >

EU の Farm to Fork 戦略、日本のみどりの食料システム戦略等、世界的に化学農薬使用低減が謳われているが、化学農薬に代わる防除手段の切り札はまだない。化学農薬に依存しすぎない防除体系の中で生物農薬は基幹的技術として位置づけられるが、現在、広く普及しているとは言い難い。本講演では演者のこれまでの取り組み（天敵と気門封鎖剤併用、アカメガシワクダアザミウマ、バンカーシート、果樹での天敵利用）や現在の取り組みを紹介し、今後どのような生物的防除技術を目指したらよいか考えるきっかけとなればと考えています。

### < オンライン講演会参加 申し込み要領 >

以下の申込フォームにアクセスし、お名前とメールアドレスをご入力の上、お送りください。開催日までに Zoom の接続情報をメールでお知らせ致します。

<https://forms.gle/aTS4tpWqosqjg4Sm6>

